

凡 例

構成

一 本巻に収録した音楽学部発足後の原資料は、これまでの巻で取り扱った原資料がほとんど縦書き・縦組であったのに対して、大半が横書き・横組となっている。しかるに、本百年史は縦組構成を原則としているため、本巻でも本文・表とも、それら横書き・横組の原資料をできるだけ縦組に直して収録した。ただし、カリキュラム表など、表の性格や字詰の関係で、横組の方が見やすいもの、あるいは横組にせざるをえないものは、本文とともにそのまま横組の形で収載した。

二 解説文は原則として原資料より文字を小さくして区別した。ただし原資料についても、当該原資料中の文字の大きさの使い分けに従って、一部文字を小さくしたり、あるいは紙幅を節約するために、原資料全体の文字を小さくしている場合がある。

三 原資料中の傍線はそのまま残したが、ゴシック体は、本書構成上の小見出しと紛らわしくなるのを避けるために、明朝体に改めた。ただし、原資料どおりゴシック体を用いたほうが判然とする場合には、ゴシック体になっている場合がある。

四 本字と他の機関・組織などと交わされた文書が横書きの場合、まず宛名が左上に、次いで差出人名がそれより右下に記されているが、これを縦組に直すにあたっては、縦書き文書の書式原則に従って、まず差出人名を下方に示し、次いで宛名をその左上に記した。

文字

一 漢字の旧字体・新字体の使い分けは原資料どおりとした。

二 人名には原則として、大学に提出された正式書類に記されている文字を使用した。

三 原資料中、解説できない手書き文字、あるいは印刷が不鮮明なため読みとれない文字は、その箇所に□を記し、解説できてもそれが不確かな場合にはその文字を□で囲んだ。

四 原資料中の誤用文字もしくは疑義のある文字は、明らかに誤植と思われる場合は訂正したものもあるが、原則として原資料どおりとし、その右側に「ママ」と記入した。

五 横書き・横組の原資料を縦組に直す場合、原資料中のアラビア数字は原則として漢数字に改めた。そのさい、二桁の数字は間に「十」を入れたが、表のなかでは「十」を省いた。

六 横書き・横組の原資料が箇条書きで、各条項の頭の番号がアラビア数字で記されている場合、それを縦組に直すにさいしては、その番号にはそのままアラビア数字を用いた。ただし「第○条」などと、その数字の前後に言葉が付いている場合には、漢数字に改めた。

七 横書き・横組の箇条書きで、番号の左右にパーレンなどの括弧が付いている場合、それを縦組に直すさいには、原則としてその括弧を番号の上下に付けなおした。

見出し・出典など

一 原資料に付けられた見出しで「()」付きのものは、編集者が便宜上もしくはわかりやすくするために設けた見出しである。

二 原資料が印刷物以外の場合には、その末尾に「(手書き)」(謄写版)「タイプ」などと記してその種類を示し、また原資料が横書きでないし横組でありながら、本書で縦組に直したものについては、同様に末尾に「(横書き)」(横組)と断り書きをした。

三 原資料の出典はそれぞれの末尾に「()」付きで示した。

括弧

一 「『』」は書名、雑誌名、新聞名を表す。

二 原資料中の「()」は編集者の補記であることを示す。